

を収録する。講演録からウイлта語のアクセントに関する考察を取り上げたい。著者は樺太から釧路に移住したウイлта族の北川源太郎氏についてウイлта語のフィールド言語調査をおこない、その成果としてウイлта語のアクセント位置が予測できるようになった。後ろから 2 番目のモーラにアクセント核があり、そこが母音や子音だけからなる場合はひとつ前のモーラにアクセント核が移るという規則を見出したのだが、この考察は師匠の池上氏から評価されなかったと述べる。本書は再評価のきっかけを多くの言語学者に与えるだろう。

最後に、ツングース諸語とそれらの言語を話す人々についての入門書として本書を手にとってほしい。そして本書集録の書評などで紹介された書籍などへと、さらに北方諸民族とその言語・文化へと興味は広がっていくことだろう。

引用文献

金田一京助. 2004. 『古代蝦夷とアイヌ』平凡社.

松田素二・フランシス・B・ニャムンジョ・太田 至編. 『アフリカ潜在力が世界を変える—オルタナティブな地球社会のために』京都大学学術出版会, 2022 年, 452 p.

阿部利洋*

本書は、5 年 2 期にわたる大型科研プロ

ジェクト（「アフリカの潜在力を活用した紛争解決と共生の実現に関する総合的地域研究」2011–2016 年, 『『アフリカ潜在力』と現代世界の困難の克服—人類の未来を展望する総合的地域研究』2016–2020 年）の最後出版された成果論集である。日本とアフリカから 100 名を超える研究者が集結した共同研究の成果としては、既に和文 5 巻組 [太田 2016], 英文 7 巻組 [Matsuda 2021] のシリーズ論集が出版されており、そこでの多様な各論を踏まえた本書は「プロジェクトの創設から中核となって共同作業を推進してきたコア・メンバーと、それを継承して未来につなが世代のメンバーによって、その議論を発展させた」ものと位置づけられている (p. 27)。

長期にわたり多数の研究者が関与する共同研究では、アフリカ潜在力というキーワードがあらかじめ定義されることはなく、「紛争解決と共生実現、環境保全や格差是正といった、今日、地球規模で『問題化』しているイシューに対して、アフリカ社会が他社会との交流や葛藤をとおして創造してきた対処能力を、人びとの生活の現場に注目しつつ取り出し、人類社会に共通の資産としよう」(p. 14) という緩やかな共通認識のもとで進められた。

ここには、①「アフリカを含む現代世界が有効活用できる知識・情報は何かという問いに対するアフリカ発の答えを提示する」志向とともに、②「異質な存在が対話をとおして何かを創造する機会を触発する」ねらいも込められている。エドワード・キルミラが

* 大谷大学社会学部

「ローカルな知識や実践を、単なるオルタナティブな言説としてではなく、魅力的な言説として、どのように活用できるか（中略）『アフリカ潜在力』という考え方に深く沈潜し、それを継続することが重要である」（p. 364）といい、フランシス・ニャムンジョが「『アフリカ潜在力』のレパートリーは計り知れないほど豊かになる」（p. 401）方途を指し示すのは、このキーワードが、アフリカ側の研究者たちにとっても持続的な謎の源泉となり、新たな思考を喚起するものであったことをうかがわせる。以下、各章の内容を短く紹介する。

第1章「認識論的相対主義を恐れること勿れ—アフリカ哲学を『普遍主義』のわなから解放する」では、アフリカ哲学という視点・ジャンルが理論的・方法論的に直面するジレンマはアフロセントリズムと認識論的相対主義にあり、それを乗り越えるヒントが認識論的多様性にあると論じる。これは、上記①に該当するアフリカの独自性に普遍的な意義を読み込む際に、論者が共有すべき理論的な共通項を示すものと考えられる。

第2章「潜在的な文化的ポテンシャルを活性化し社会的問題の解決にとり組む—アフリカの大衆文化がもつ開放的な政治思想の可能性」は、アミルカル・カブラルとワンバ・ディア・ワンバの思想を取り上げ、「アフリカの人びとが新植民地主義的な国家によって支配されている」（p. 90）現状を乗り越える指針を提示する。とりわけワンバが目したパラヴァー（共同体の全員が参加する問題解決のための会議）について、その独特なコ

ミュニケーション形式の活用可能性を指摘する。

第3章「自由な移動と親族のホスピタリティー—地球規模の課題に対処するために必要な連帯を生み出すアフリカ潜在力」は、アフリカにおいて移動する「他者を保護することは義務であり、ホスピタリティは贈与として与えられる」（p. 123）という規範的観点から、アフリカ人の連帯の経験／イデオロギーを考察する。とくに若者の移動とその処遇は、将来的な潜在性に関わってくるという視点は示唆的である。

第4章「パラヴァーとコンセンサス—アフリカ社会において相克はいかに解決されるか」では、コンセンサスの創出という観点からパラヴァーの意義が掘り下げられている。パラヴァーでは、当事者間の和解と共同体の紐帯・一体性の回復を主目的とし、近代司法における賠償や罪状の確定は副次的とされるが、紐帯・一体性を回復・強化するために用いられる手法や型が、合意に到達した際の「深い達成感」（p. 162）とともに、臨場感あふれる描写で説明されるのである。

第5章「ケニア北西部における地域住民によるローカルな平和構築の潜在力—ウェスト・ボコットの事例より」は、紛争解決においてローカル・オーナーシップを制度化することの難しさに着目する。この章ではボコットを舞台とする民族紛争をめぐる取り組みを検討するなかで、活動に対する正統性の付与が成否を左右するカギであると論じる。

第6章「食欲で残忍な首長たち—南スーダンの人びとは、なぜ最悪の指導者に対して

寛容なのか」は、アフリカ潜在力という概念に対して、他の章と比べるとやや異質なアプローチを採用している。南スーダンの新国家建設は、政治家の果てしない汚職腐敗と紛争の再発によって、国民に対する裏切り(p. 208)に帰結した一方で、そうした政治家に対する人びとの奇妙な「寛容性」(p. 320)が現出している。ここでは、肯定的で創造的でないと思われる現実からアフリカ潜在力の陰陽を考える必要性も示唆されるのである。

第7章「共感と共有を通じた知識形成」は、文字を用いない口承に着目することから、アフリカの伝統社会での教育と知識について論じる。そして、口承・口述をベースとする「Presentational (発表的な) 知識」は、古典的な西欧認識論を支えてきた「Representational (写実的な) 知識」よりも、情報化時代の教育の可能性に示唆を与えたとする。

第8章「サハラ以南アフリカにおける子どもと子ども性—開発問題の視点からみるその実態と未来への提言」では、アフリカの子ども性を脆弱・制約・窮乏・生存の危機といった側面から認識するアフロ・ペシミズムの問題を指摘する。一方で、質の高い教育を実現することでアフリカの子ども性を再構築する条件が整っていない現状についても批判的に論じている。

第9章「ねだりと贈与—トゥルカナとアフリカ都市の『贈り物』に関する試論」は、アフリカへ赴く側からすれば悩ましく否定的に経験されがちな「ねだり」の仕組みを仔細に検討することをつうじて、「与え手と受け

手双方が合意に至る協働のプロセス」という観点から再認識する (p. 306)。ねだることが正当な行為であり、堂々に行なわれる社会では、自己の生の意味や孤独の質も、私たちの社会におけるものとは大きく変わってくるだろう。

第10章「ごみの価値化と『アフリカ潜在力』—大量消費社会において忘れられた物の『生命』とその生まれ変わり」は、編者が「未来につなぐ世代のメンバーによって、その議論を発展させた」章の代表例となっている。砂漠化問題に直面するニジェールのサヘルの荒廃地に都市ごみを投入し、そこに集まるシロアリの諸活動を活用し緑化を進めた20年に及ぶ実験の発展と成果が、具体的に描出される。

第11章「『アフリカ潜在力』という観点から見た在来性およびアフリカの現実の新しい捉え方」では、アフリカ(人)のロマン化・本質化を回避したうえで、「在来性の概念は、オルタナティブな社会的ビジョンにもとづいてアフリカ的なものとは何かを考えるために役に立つ」(p. 361)という立場を採用する。このようにして、次章の議論と理論的な接続が図られている。

第12章「セシル・ジョン・ローズ—帝国主義的統治における『完全な紳士』」は、不完全性 (incompleteness) とコンヴィヴィアリティ (conviviality) というキー概念を用いて、ケープタウン大学におけるセシル・ローズ像の損壊・撤去・移転・修復に至る一連の過程を論評する。政治的緊張のなかで慎重を要する事例を、正義とは異なる実践的指針か

ら描出する筆致からは、上記のキー概念を現実の困難に適用する可能性を鮮やかに示すものとなっている。

第13章「アフリカ潜在力の源泉としての日常性と生活世界」では、第2期プロジェクトの代表者でもあった編者が、自身のフィールドや日本社会との接点を論じつつ、アフリカ潜在力概念の特徴として把握される7つの観点—（複数性や流動性、不完全性、異種結節力など）—を析出し、冒頭①に該当する多様な議論を整理している。

さて、アフリカ潜在力とは何か、という問いは、この表現を前に常についてくるものである。しかしながら本書を手にとれば、その問いに正面から取り組んでいるようにみえる。認識論的多様性（第1章）、パラヴァー（の仕組みと目標）（第4章）、不完全性とコンヴィヴィアリティ（第12章）といった概念が、それぞれ注意深く、かつ繊細に、何らかの現実が—対—対応の処方箋とならない論理で差し出されていることにも気づかされる。上記①の体裁をとる議論であっても、それは②に接続するように展開するのであり、逆にいえば、②の論理が①の形式として顕現しているように読めるのである。

一方で、上記①を集中的に検討しようと読み始める読者にとっては、意外に感じる章もいくつかあるだろう。序章、第4章、第11章、第12章、第13章（そして部分的には第1章と第7章）はそのような関心に対応する内容となっているが、それ以外の章は、どちらかといえば上記②を志向しているからである。そこでは（アフリカ人としての／ア

フリカ社会のアイデンティティを前提として）何らかのアフリカ潜在力をどのように実現しうるか、という議論が進められ、あるいは、不完全性をつうじた相互作用や「異種結節力」という視点を前提としたうえで、それらを現実に応用する過程が示される。そうした議論は、アフリカ潜在力の意味を論理的に明示化する段階をスキップして、その表現に触発された議論や活動から、遡及的にアフリカ潜在力という表現の射程を再認識させるものだといえるかもしれない。その意味で、本書には10年間の研究プロジェクトのまとめとともに、すでに進行し始めた派生的な研究の一端が開示されているのである。

引用文献

Matsuda, M. general editor. 2021. *African Potentials: Convivial Perspectives for the Future of Humanity*, Vol. 1–7. Bamenda: Langaa RPCIG.

太田 至総編集. 2016. 『アフリカ潜在力』第1巻–第5巻. 京都大学学術出版会.

杉村和彦・鶴田 格・末原達郎編. 『アフリカから農を問い直す—自然社会の農学を求めて』 京都大学学術出版会, 2023年, 466p.

黒田末壽*

アフリカの農の潜在力と新たな可能性をとらえなおす

近代化の観点からみると、サハラ以南のアフリカ（以後サハラ以南を省く）は世界の中

* 滋賀県立大学人間文化学部名誉教授